

ジャンボ渡辺の学 富士山学



富士山は「信仰の対象と芸術の源泉」として、その類まれな普遍的価値が認められ、世界文化遺産に登録されました。25の構成資産の多くは、富士山信仰に関わる宗教的な行事や修行をする施設で、富士山の山体が信仰上の重要な対象になっています。県内に住む皆さんは、富士山の文化、歴史、宗教性、自然環境などについて、どのようなことを学び、体験してきましたか。

富士山麓さんかくの小中学校は、日頃の学習プログラムの中で、

学校教育 どう学び何を体験？

登山含め学習の体系化を



渡辺豊博さん

富士への登山や登山道でのごみ拾い、バイオトイレ体験、樹海に投棄された産業廃棄物の実態把握などの「富士山学習」を探り入れてみてはどうでしょうか。全体的な富士山学習の副読本があってもいいと思います。

ただ、学校の先生自身が、富士山の登山経験も少なく、富士山の自然環境の現状や問題、魅力と不思議について、子どもたちに興味深く伝えていくことができるのかという点と少し心配です。ふもとで生活し、富士山を

日常的に実感している子どもたちでも、実際に登った経験があるのは10%程度だと聞いたことがあります。四季折々の富士山の自然美や富士山信仰の宗教的な意味を学ぶ機会もありません。地域の宝物の文化や歴史を学ぶことなしに、富士山を含めた故郷・地域への「愛郷心」はなかなか芽生えません。

昔の富士山は、富士講者らの登拝信仰を通して、人間力を鍛え、人としての生き方を主体的に考え、自ら精進するための修行の場で、教育の場だったと評価しています。「懺悔懺悔・六根清浄」を唱えながら、苦しさで耐え、遠く、江戸から徒歩で富士山を目指したのです。

大金と多くの時間を要してまで、人々は、なぜ、富士山に登ったのでしょうか。私は、この「富士講」の仕組みは、社会的な弱者が寄り添い、助け合う、相互補完・支援の「共助」の仕組みだと考えています。富士山登山を宗教上の目標に位置づけ、その実現のために人々が連携・協力し、富士山のご利益やパワーを享受し合う。絆と弱者の目線に添った共助の仕組みの重要性と有効性を体験することによって、人々の一体感を醸成させるための国家的な教育プログラムだったのではな

いかと分析しています。また、多様性に満ちた富士山の森林地帯を1歩ずつ登ることによって、自然美や神秘

性、壮大さを実感することができ、自然界への畏敬の念を学んだのです。当時も一種の入山料を支払っていたともいわれ、登山者はし尿を処理するために箱を担いで登り、その後、中身を肥料として活用したと聞いています。まさに富士山登山を通して、自然と人間が共生していくための具体的な知恵・循環システムを学んでいたのです。

世界文化遺産登録の意味は、富士山を教育上の生きた教材として評価・活用することであり、登拝信仰を通じた自然と人間との共生の知恵、共助の仕組みを学ぶことです。登山教育も含めた富士山学習の体系化と実践的な学習プログラムの作成と実施が、富士山の「防人」を育てるために必要とされています。

わたなべ・とよひろ
都留文科大教授